

2025年11月30日 待降節第1主日礼拝メッセージ
「クリスマスを迎える準備」

牛田匡牧師

聖書 テサロニケの信徒への手紙 I 5章 1-11節

今年のカレンダーでは、今日でとうとう11月が終わり、明日から12月が始まります。教会の暦では、今年は今日から「アドベント」が始まりました。「アドベント」というのは、漢字で書くと「イエス・キリストの『降誕を待ち望む』」ということで「待降節」と書きますが、元来のラテン語(adventus)では単純に「来る」「到来する」という意味でした。さて、この時期に「来るもの」と言えば何でしょうか。

保育園で子どもたちに、「もうすぐ12月だね、楽しみだね」というと、すぐに「クリスマスにサンタさんがプレゼントを持ってきてくれる」という話題になります。それのお家でも、きっとサンタさんへのお手紙などを楽しみに書いているのだろうと思いますが、歴史的にもサンタクロースよりももっと昔から、この時期に「到来する」ものは、一体何だったのかと考えると、それは「闇」だったのではないかと思います。夕方になるともう5時くらいから暗くなって、寒くなってきます。朝も陽の出るのがとても遅くなりました。昼の時間がすっかり短くなり、夜の時間がとても長くなっていますから、季節の移り変わりを実感します。また空気が乾燥していることもありますし、夜空の星も鮮やかに目に映るようになって来ています。こうして、もう直に12月の下旬になると、日中の時間が最も短くなる「冬至」の日を迎えます。

教会では、今日もアドベント・クランツのろうそくへの点灯を行いましたが、次第に闇が深まっていく時期にあって、それでも全てが闇に飲み込まれてしまうのではない。大きく深い闇の中であっても、そこにも確かに光があるということ、闇が深まりゆくと同時に、実は光もまた段々と明らかにされていくことを象徴して、クランツの点灯が行われて来たのだと思います。「ヨハネによる福音書」の冒頭、1章5節には「光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった」という言葉がありますが、この言葉こそ「クリスマス」の本当の意味を的確に表しているのではないかと思います。

今日、先ほど歌いました賛美歌「だから今日、希望がある」は、南米のアルゼンチンで作られた歌だそうですが、現地でクリスマスによく歌われている賛美歌だと

ということで、私は先日の研修会で初めて知りました。アルゼンチンでは、内戦やクーデターなどの政治不安が続いた中、今から約 40 数年前の 1976 年から 1983 年にかけて、当時の軍事政権によって「左翼ゲリラを取り締まる」という名目で、労働組合員、政治活動家、学生、ジャーナリストなど、多くの人々が不当に逮捕、監禁、拷問され、推定で約 3 万人が死亡または行方不明となつたそうです。そのいわゆる「汚い戦争」の下、当時の現地のカトリック教会では、軍事政権に反対して殺害された司教や司祭もいたそうですが、大多数の教会関係者はそのような「汚い戦争」に対して異議を唱えることなく沈黙を守り、結果的に軍事政権を支持することに加担してしまつたとも言われているようです。そのような時代のただ中 1979 年に、この賛美歌は作られ、歌われ始めたのだそうです。

多くの仲間たち、親しい友人、家族がある日突然、当局によって逮捕連行されたり、行方不明になつたり、拷問されたり、殺されたりしていくようなという絶望的な現実。また自分もいつ同じような目に遭うかもしれないという恐怖や不安、先行きの見えない真っ暗闇のような状況……。けれども、そのような中にあっても、「私たちには希望がある、今日も恐れずに闘うことができる、抑圧された民衆の未来を見つめることができる」(原詩)と力強く歌っています。何故、そんなことが可能なのでしょうか。それは「主がこの世界に、この歴史の中に、最も小さくされた姿で、貧しい馬小屋で生まれたから。暗い夜に光を灯し、沈黙に言葉を与え、頑なな心に愛の種を蒔かれたから」だと歌っています。暗闇が暗いほど、絶望が深いほど、神の子がどこに生れたのか、誰の所にやって来られたのか、光はどこに灯されたのか。その事実が持つ意味が深まっていくのではないでしょうか。

今回の聖書のお話も、そのような困難な状況の中で書かれたパウロの手紙でした。「テサロニケの信徒の手紙」は、紀元 50 年頃に執筆されたと考えられますので、新約聖書に収められているパウロのたくさんの手紙の中で最初に書かれた、最も古い手紙だと言われています。テサロニケというのは、エーゲ海に面したマケドニア州最大のローマ帝国の港湾都市で、当時も現代でも大勢の人々が集まっている大都会でした。「使徒言行録」17 章(1-10 節)によると、パウロはシラスと共にテサロニケの町に入り、そこにあったユダヤ人の会堂で話をしたと記されています。それによってテサロニケの町にも教会が誕生したのでしょうか。です

が、その一方で、パウロたちに反対する者たちが、暴動を起こして、町を混乱させ、ローマ当局に訴えるということもあり、パウロたちは慌てて隣町のベレアへ逃れるということもありました。

その他、当時はローマの町でユダヤ人は暴動ばかり起こしているということで、キリスト者も含めた「全てのユダヤ人はローマの町から出ていくように」という皇帝クラウディウスの勅令」(使徒 18:2)も出されていました。パウロたちはテサロニケに向かう前に立ち寄ったフィリピでも反対者たちに襲われて、役人に引き渡され、投獄され鞭打たれたりするなどの迫害に遭っていました(使徒 16 章)。さらにテサロニケの教会の人たちもまた、パウロたちが受けたような苦難と同様の苦難を、テサロニケの地において経験していましたと、手紙(1テサロニケ 2:14)には記されています。

そのような苦しい迫害下の状況の中で、人々は来るべき「主の日」、即ち世界の終わりの日、救いの完成される日のことを、「今か今か」と待ち望んでいました。それが今回の 5 章 1 節からです。「1 きょうだいたち、その時と時期がいつなのかは、あなたがたに書く必要はありません。2 主の日は、盗人が夜来るように来るということを、あなたがた自身よく知っているからです」……。その日はもう直に、必ず来ますよ。しかも、「盗人が夜に来るよう」というのは、突然、予期せぬうちに、という意味の言い回しですが、続く 3 節 4 節でも「突然に来ますよ」と繰り返し述べられています。それから「盗人」や「夜」という言葉から派生、連想する形で手紙は続けられ、突然にやってくる「主の日」「救い」は盗人のように怖い者、恐ろしい者ではなく、あなた方を襲うことはありません。なぜなら、「あなた方は盗人のように夜に属しているのではなく、光の子、昼の子だからです」(5 節)とも述べられています。

さらに、常に「目を覚まし、身を慎み」(6 節)、「信仰と愛の胸当てを着け、救いの希望の兜をかぶりましょう」(8 節)ともあります。これらの表現が伝えていることは、もちろん「町の中で普段から鎧や兜を身に着けておきましょう」という意味ではなく、4 節に「その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません」とあり、9 節に「神は、私たちを怒りに遭わせるように定められたのではなく、私たちの主イエス・キリストによって救いを得るよう定められた」とあるように、「だから、心

配しないで大丈夫」、「私たちは目覚めていても眠っていても、いつも主と共に生きているから」(10)ということでした。

自分の能力や努力では、もはやどうしようもなく、抵抗しようがないような大きな暴力や圧力を前にして、逃げ出すしかなかったり、また逃げ出すことも出来ず、ただ押し黙るしかできなかったり、絶望するしかないかのように思える時であっても、それでも尚そこには「確かに希望がある」と言えるかどうか。10 節の言葉「私たちが、主と共に生きるために、主は私たちのために死んでくださいました」とは、自身の命をも顧みない程に私たちを大切にされた神の姿を表わしています。それ程の大きな神の思いを受けている私たちは、神の力が共に働いているということに信頼して、共に生きるため、励まし合い、恐れずに立ち上がり、立ち向かっていくことができる……。そのように励ましている手紙でした。

クリスマスを迎える準備……。それは目に見える具体的な形としては、クリスマスツリーやアドベント・クランツを出して飾り付けをしたり、プレゼントを用意したり、パーティーの段取りや準備を進めることかもしれません。しかし、それらが本当の「クリスマス」なのでしょうか。どうでしょうか……。心が躍るような軽快なクリスマスソングやお洒落で華やかなお店のクリスマスセールから離れて、人知れず、悩み、苦しみ、明るい希望を持つことができないと感じているような人の所にこそ、クリスマスのみどり児は来られるのではないかと思います。戦争が続く中、今日の糧を得ることもままならず、明日への希望を考えることもできないような人の所こそが、人間の休む宿屋には居場所が与えられず、家畜小屋の飼い葉おけ(まぶね)の中に寝かされたイエス・キリストの生まれた所(ルカ 2:7)だったのではないでしょうか。

今日から始まるアドベント。闇がいよいよ深くなっていく 4 週間。暗闇から目を背けて、きらびやかな光に目を向けるのではなく、むしろ本当の光、この世を照らす神の光は、闇の中にこそ小さく輝いているということ。決して消えてしまうことなく、確かに灯っているということ。そして、私たち一人一人と、いつも共におられるということに、改めて目と心を向けていきたいと思います。クリスマスを迎える準備は、もう始まっています。